

日本特殊教育学会参加及び自主シンポジウム企画についての報告

神山 努
(企画部)

要旨：日本特殊教育学会第50回大会と、同大会で筆者が企画した自主シンポジウム「発達障害児の就学前支援機関における連携の課題と解決」について報告する。日本特殊教育学会第50回大会は、平成24年9月28日(金)～30日(日)の3日間にわたり、多数の参加者を得て、つくば国際会議場で開催された。本大会のテーマは「未来のすべての子どもたちの教育ニーズの実現に向けて」であった。プログラムについては、日本特殊教育学会が設立して50周年の大会であることから、様々な記念企画が行われた。その他も数多くのプログラムがあり、学術講演が1件、教育講演が2件、受賞者講演が3件、学会企画シンポジウムが16件、自主シンポジウムが101件、ポスター発表や口頭発表が約650件行われた。筆者が企画した自主シンポジウム「発達障害児の就学前支援機関における連携の課題と解決」では、発達障害幼児の支援者4名に話題提供してもらい、就学前支援機関の連携とその課題について議論した。

見出し語：日本特殊教育学会、プログラムの報告、発達障害、連携

I. はじめに

日本特殊教育学会第50回大会が、平成24年9月28日～30日の3日間にわたり、茨城県つくば市のつくば国際会議場で開催された。

本大会のテーマは、「未来のすべての子どもたちの教育ニーズの実現に向けて」であった。多くの記念企画、講演、学会企画シンポジウムが企画され、インクルーシブ教育システムの構築や東日本大震災をふまえての災害対策など、我が国の特別支援教育にとって喫緊といえる課題や、脳科学や歴史研究など様々な研究手法に基づいた知見からの話題、各障害種に特化した課題など、非常に幅広い内容が取り上げられた。また、アジアや北欧諸国など国外において、障害がある人々に対する支援に関する講演やシンポジウムなど、日本の特別支援教育を考える上で大変参考になる企画も多かった。

本年度は、1日目が平日であり、また、3日目は台風が近づいており遠方からの参加者は早めに帰る必要があったなどにもかかわらず、研究者や教育・福祉の実践者など、多様な立場から多数の参加者を得た。

本大会は日本特殊教育学会が設立して50周年となるものであり、それを記念した企画も多数行われた。

以下では学会の各プログラムの内容と、筆者が企画した自主シンポジウムについて報告する。

II. 学会参加についての報告

初日の9月28日は、オープニングセレモニー、研究奨励賞・実践研究賞受賞者講演、特別講演、教育講演のほか、学会企画シンポジウムが5件、自主シンポジウムが32件、ポスター発表が1セッション行われた。2日目の9月29日は、日本特殊教育学会創立50周年記念シンポジウム、学術講演、ワークショップ、口頭発表のほか、学会企画シンポジウムが6件、自主シンポジウムが15件、ポスター発表が2セッション行われた。また、その後に日本特殊教育学会50周年記念パーティーが同会場にて行われた。3日目の9月30日は、教育講演と、学会企画シンポジウムが5件、自主シンポジウムが52件、ポスター発表が1セッション行われた。いずれにおいても、多数の参加者の下に活発な議論が行われていた。以上の3日間の日程を表に示した。

1. 記念企画

特別講演が1日目の午後に行われ、カナダにあるサイモンフレーザー大学のキエラン・イーガン

表 日本特殊教育学会第50回大会の3日間の日程

9月28日		9月29日		9月30日	
28日 9:00~11:00	・オープニングセレモニー	・学会企画シンポジウム 2件	・学会企画シンポジウム		
29日 9:00~11:00	・研究奨励賞・実践研究賞受賞者	・学術講演	(9:30~12:30)		
30日 9:00~10:30	講演	・ワークショップ	・自主シンポジウム 18件		
	・自主シンポジウム 15件	・ポスター発表			
28日 11:15~12:45	・会務総会	・自主シンポジウム 16件	・学会企画シンポジウム 3件		
29日 11:30~13:00			・教育講演		
30日 10:45~12:45			・ポスター発表		
28日 13:00~15:00	・特別講演	・日本特殊教育学会創立50周年記念シンポジウム	・自主シンポジウム 18件		
29日 13:30~17:45		・学会企画シンポジウム 4件			
30日 13:00~14:30		(そのうち2件は13:30~16:30, もう2件は13:30~15:30)			
28日 15:15~17:45	・学会企画シンポジウム 5件	・口頭発表 (13:30~15:30)	・学会企画シンポジウム		
30日 15:00~16:30	(そのうち2件は15:30~17:30)	・ポスター発表 (13:30~15:30)	・自主シンポジウム 17件		
	・ポスター発表	・ポスター発表 (13:30~15:30)			
28日 8:00~19:30	・教育講演	・50周年記念パーティー			
29日 18:00~	・自主シンポジウム 17件				

(Kieran Egan) 氏より、「教育カリキュラムにおける一人一人の子どもの想像的な活動 (Imaginative engagement of every child in the school curriculum)」をテーマに、子どもたちの学習活動における想像性を導き出すための指導の枠組みである、想像的教育 (Imaginative Education) について紹介された。また、サイモンフレーザー大学内に設立されている Imaginative Education Research Group が開発した2つのプログラムが紹介された。1つは、「Learning in Depth」と呼ばれるプログラムで、通常のカリキュラムに加えて、一人一人の子どもたちに学校生活全体を通して学ぶ特別な課題が与えられ、それについて子どもたちが自分のポートフォリオを作成するというものであった。もう1つは、「Whole School Project」と呼ばれるプログラムで、特定の課題に対して、校内の子どもたち皆で3年間取り組むというものであった。これらの特徴の1つとして、子どもたちに知識や技能を獲得させることのみを目標とせず、子どもたちの想像力を刺激して、何を何のために学ぶのかの意味を伝えることを重視している点が挙げられると思われた。近年の特別支援教育においても、子どもたちが自らの学習の経験を意味付けしたり価値

づけしたりできるように支援することの重要性が指摘されている。本講演で紹介されたプログラムは、障害がある子どもたちに対して想像力を刺激し、学習の意味を伝える教育を、どのように行うのかを考える上で示唆を与えるものであったといえる。

また、この講演では、演者の英語による発表に対する同時通訳が、参加者一人一人に配付されたイヤホンを通して提供された。海外の特色ある取組について情報収集したくても、英語の聞き取りが壁になることも多く、大変素晴らしい配慮であった。

もう1つの記念企画として、日本特殊教育学会創立50周年記念シンポジウムが、司会者が日本特殊教育学会理事長・筑波大学名誉教授の前川久男氏、話題提供を元日本医療科学大学学長・筑波大学名誉教授の佐藤泰正氏、中部学院大学教授・東京学芸大学名誉教授の堅田明義氏、国立特別支援教育総合研究所上席総括研究員の柘植雅義氏、茨城大学教授の荒川智氏、筑波大学附属大塚特別支援学校教諭の安部博志氏、静岡県立大学教授・特別支援教育の在り方に関する特別委員会委員の石川准氏の6名が担い、「日本特殊教育学会のこれまでとこれから—今度の10年を見据えて：インクルーシブな社会と教育の構

築一」をテーマに行われた。話題提供の内容については、日本特殊教育学会設立時からの歴史を振り返り、これまでの50年における特殊教育学会の設立や活動には、障害がある子どもたちの教育に寄与できる研究を活発にしたいという思いの下、多くの議論を重ねて様々な取組が行われてきたことについて述べられた。また、日本における障害がある子どもたちの教育についてこの50年間の変遷、平成19年から始まった特別支援教育、そして今後のインクルーシブ教育システムの構築に向けてこれからどのような課題に取り組む必要があるのかなどが論じられた。

2. 講演

講演は学術講演が1件、教育講演が2件、受賞者演が3件行われた。

学術講演では、国立台湾師範大学特殊教育学系教授の郭静婆氏より、「台湾における英才・才能教育の実際」をテーマに、台湾の「言語、数学、社会科学又は自然科学などの学術領域において、同年齢児より卓越した潜在能力又は傑出した実績がある」児童生徒を対象とした教育である、資優教育について紹介がなされた。同年齢の子どもの平均に比べて高い能力がある子どもは、通常の教育では学業面、心理面、社会面などに困難が生じる場合があることが指摘されている(杉山・岡・小倉, 2009)。そのため、このような子どもに対する教育において、特別な支援の必要性が指摘されており、台湾に限らずいくつかの欧米諸国では、特別な教育プログラムが実施されている(是永, 2012)。しかしながら、日本では同年齢の子どもの平均に比べて高い能力がある子どもたちに対する教育が十分に検討されているとはまだまだ言い難く、重要な問題提起をした講演であった。

2件の教育講演のうち1つは、「特別支援教育のためのツールとしての脳科学」をテーマに、九州大学大学院医学研究院の飛松省三氏より、広汎性発達障害やアルツハイマー病の、視覚認知障害などに関する研究知見について、脳科学の観点から紹介がなされた。もう1つは、明星大学教育学部の梅谷忠勇氏より、「知的障害児の学習研究の成果と今後の研究・実践への示唆ー弁別学習を通してー」をテーマに、演者らが中心に行ってきた知的障害児の弁別学習に

関する研究などについて紹介がなされた。いずれも基礎研究からの知見を広汎性発達障害児や知的障害児の支援に応用した内容であり、研究と実践がつながった講演であった。

受賞者講演では、平成23年度研究奨励賞及び実践研究賞の受賞者3名が演者であった。まず、甲南大学人間科学研究所の山根隆弘氏より、「発達障害児・者をもつ親の心理的適応研究とその課題」をテーマに、特に高機能広汎性発達障害児・者をもつ親の心理的適応に関しての、障害認識過程と子どもの障害に対する意味付けの2つの観点から、自身の研究の経過について紹介がなされた。次に、筑波大学大学院人間総合科学研究科の野内友規氏より、「実行機能の不全と「読み困難」ー高機能広汎性発達障害のある中学生生徒を対象にー」をテーマに、「読み困難」を示す高機能広汎性発達障害児、「読み困難」を示さない高機能広汎性発達障害児、定型発達児を対象とした、実行機能の不全と「読み困難」についての実験的な検討について、自身の研究の経過について紹介がなされた。最後に、筆者が「知的障害・発達障害児の保護者支援における保護者の負担軽減の検討」をテーマに、知的障害児や発達障害児の保護者に養育スキルを教授する保護者支援において保護者にかかる負担の軽減を検討した自身の研究の経過を紹介した。

3. 学会企画シンポジウム

学会企画シンポジウムは16件が行われ、様々な話題が取り上げられた。以下に各シンポジウムの表題を記した。

- 1) 「特殊教育」の広がり と 深化をめぐって (3) ー通常教育との連携と特別支援教育の広がりー
- 2) 東アジア地域における特別なニーズのある子どもの教育の新たな研究動向と課題ー中国, 韓国, 台湾, 日本における今後10年間の研究を展望するー
- 3) 韓国の特殊教育・障害者雇用からみた日本の特別支援教育・障害者雇用の課題ー何がその格差を生んだのかー
- 4) 視覚障害教育の現状・課題・展望 FOR NEXT 50 (その3) 視覚障害教育の今後の展開ー教育は医

療・福祉の一步前を進めるのか？－

- 5) 聴覚障害教育における手話と人工内耳
- 6) 大学における障害学生支援の現状と課題～研究と実践の視点から考える支援Qualityの向上～
- 7) 「自立と社会参加」を目指す少年院の取組み
- 8) イタリアにおけるインクルーシブ教育の実践と展望
- 9) 東日本大震災から学ぶもの～次なる大震災に備えて学会は何をするべきか
- 10) 自立活動研究の到達点と展望～日本特殊教育学会の研究論文の分析を通して～
- 11) 重複障害教育から創出された教育実践の視点の共有と今後の教育のあり方
- 12) 北欧におけるインクルーシブ教育の挑戦と日本の課題
- 13) 若手研究者による研究の国際発信の意義と手順について～英語報告モデルケースを通して～
- 14) 発達障害のある子どもは、実行機能にいかなる困難を抱えているか
- 15) 共生社会の実現に向けたユニバーサル・デザインの支援
- 16) 【研究委員会】クロージング・セッション「インクルーシブ」な教育・社会の実現をめざして；わたしたちの課題

上記のシンポジウムのうち1, 3, 7, 8, 9, 12, 15, 16は日本特殊教育学会第50回大会研究委員会企画シンポジウムであった。そのうち, 3, 8, 12, 15は「世界と日本のインクルーシブ教育の課題」についてのシンポジウムであり, 北欧, イタリア, 韓国などの諸外国のインクルーシブ教育システムや, 日本のユニバーサル・デザインによる支援について, 現状と課題が議論された。また, 7, 9は『災害・危機支援と「インクルーシブ」な社会』についてのシンポジウムであり, 少年院での取組や, 東日本大震災などが話題に取り上げられた。最後の16において, 上記7つの研究委員会企画シンポジウムを総括して, 日本のインクルーシブ教育・社会の展望について議論された。インクルーシブ教育システムとは, 障害者の権利に関する条約第24条によれば, 「人間の多様性の尊重等の強化, 障害者が精神的及び身体的

な能力などを可能な最大限度まで発達させ, 自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下, 障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組み」とされており, 現在日本ではその構築に向けて, 様々な検討がされている。一連のシンポジウムは, インクルーシブな教育に対して様々な取組をしている海外諸国の情報をもとに, 日本では今後どのような取組が必要かを考える上で1つの示唆を与えた内容であったと言える。

4. 研究発表

本大会は発表件数が例年に比べて多く, 自主シンポジウムは101件, ポスター発表や口頭発表は約650件が実施された。発表内容については, 学校や療育機関の支援に関する実践研究や, 組織内の課題を整理したものなど多岐に渡った。発表者については, 特別支援教育の研究者だけでなく, 特別支援学校の教員や療育の支援員など実践者による発表も多く, 研究者同士だけでなく, 実践者同士や実践者と研究者が情報交換することができる, 大変貴重な場であった。今大会のポスター発表の形式は, 発表時間の前半に1人5分で口頭説明を行い, その後, 後半の1時間で自由討論を行った。

Ⅲ. 自主シンポジウム18「発達障害児の就学前支援機関における連携の課題と解決」についての報告

以下では, 筆者が本学会大会において企画した自主シンポジウム「発達障害児の就学前支援機関における連携の課題と解決」について報告する。

本シンポジウムは児童発達支援事業など, 就学前の発達障害児とその家族を対象とした支援者4名から話題提供してもらい, 関係諸機関との連携に関する現状と課題について議論することを目的とした。その背景については, 発達障害児とその家族に対して, 関係諸機関が連携して, 年齢段階によって支援が途切れることなく, 幅広い支援を行うことの必要性が, 様々な視点から指摘されている。しかしながら, 連携に困難を抱える場合も多く, 必要な連携のあり方や, 連携の際に生じる困難を整理し, その上

で解決策を検討する必要があると考えて、本シンポジウムを行った。

1. 話題提供の内容

まず、社会福祉法人慶育会児童デイサービスそだちの石塚沙知子氏から、事業所内の支援スキル向上のために大学研究室と連携して行った、事業所内の職員研修の取組と、研修で学んだ支援方法を日々の支援において継続して行うための、定例会議の設定など事業所内の工夫について報告がなされた。次の話題提供者の筑波大学大学院人間総合科学研究科の原口英之氏は、石塚氏の事業所において研修を行った立場であり、その立場から協働で研修を企画した際に配慮したことや課題について報告された。3人目の話題提供者である社会福祉法人木犀会ケアステーションコナンの枝松慎次郎氏は、人口約1万8千人の村において、社会福祉法人の事業や村の事業で発達障害児の支援に関わっており、その立場において構築した村内の様々な支援機関との情報共有の形とその課題について報告した。最後の話題提供者である横浜市総合リハビリテーションセンターの長嶺麻香氏は、知的障害がなく発達障害が診断された子どもとその保護者が、同じく発達障害が診断された子どもとその保護者とのネットワークを構築することや、その後の継続的な療育支援への円滑な移行を目的とした早期支援プログラムについて報告した。

2. 指定討論及びその後の議論

指定討論者である横浜国立大学の渡部匡隆氏は、連携という用語が手段として用いられている場合があることと、目的として用いられている場合があること、また、連携に関連する用語が協働・コンサルテーション・研修などとても多岐に渡り、それらを整理した上で、改めて連携の方法論を検討する必要性を指摘した。フロアには、平日の18時からの時間

帯にもかかわらず、教育や福祉などの実践者や行政担当者など多様な職種から多数の参加者が見られた。フロアからの質問は、各話題提供者は福祉領域の支援機関に所属しているが、教育機関とはどのような連携を行っているのか、また、各話題提供者の機関が自身でできることとできないことは何か、などがあつた。以上のような質問に対して話題提供者それぞれから、自分が現時点で考える連携について回答があつた。

3. まとめ

以上をふまえた今後の課題として、発達障害児の支援における連携を考えるために、「連携」という用語が示す範囲を、具体的な方法とその目的の点から整理する必要性が示唆された。そのためには、これまでに行われてきた連携についての議論の整理に加えて、実際の支援場面においてどのようなニーズに対して連携が必要とされるのか、そしてそれに対して現状ではどのような連携が行われているのかを整理する必要があると考えられた。その上で、地域連携の方法論やその効果測定の方法を示し、実際にその有効性を検証する必要があると考えられる。

引用文献

- [是永かな子 \(2012\)](#). 通常学校におけるインクルーシブ教育のための教育方法：ノルウェーのLPモデルとデンマークのギフトッドプログラムを中心に. 高知大学教育学部研究報告, 72, 169-179.
- [杉山登志郎・岡南・小倉正義 \(2009\)](#). ギフトッド天才の育て方. 学研教育出版.

参考文献

- [日本特殊教育学会第50回大会準備委員会 \(2012\)](#). 日本特殊教育学会第50回大会プログラム.